

浄土

三月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雜誌第三五二号)
昭和四十四年二月二十五日 印刷 昭和四十四年三月一日 発行

第三十五卷

第三号



目 次

表紙「キジ」松濤達文画

彼岸会によせて 到彼岸	一 田 善 寿 (2)
台湾慢歩 春の旅	安 居 香 山 (6)
法話 白道をあゆむ	上 原 貫 道 (12)
十二因縁③ 現在利益のお名号 (識)	渋谷 賢 応 (15)
新刊紹介 林靈法集「仏との出会い」	(18)
ハガキでひとこと 彼岸の思い出	(20)
聖典童話 闘諍を止めよ①	つるたたんせん (22)
現代生活と宗教⑥ 業をみつめて	松 川 文 豪 (26)
ひとくち伝記③ 大日比の念仏者	高 橋 良 和 (29)



今月のことば

春とはいえ時折り余寒肌に沁むこの頃の季節です。三寒四温のいとなみの中に、春の訪れは次第に本格化してまいります。寒さ暑さも彼岸までの通り、お彼岸を迎えるこの頃は、季節の分水嶺でもあります。むかしより、人びとは肉体の上においても、寒さより解放されてのびのびとあたたかい春の訪れを味うと共に、ながい間心にたまった穢垢をとりぞいで、清浄な心を養う季節をかんがえました。すなわち、仏道修行の一週間として、お彼岸の行事をおこなっております。

むかしは旧暦によったのでしょうが、ぼたんの花が美しく咲き匂うころ、人びとは、自然の恵みに感謝するとともに、手づくりの「ぼたもち」をつくって、み仏さまにお供えし、心の修養にはげむのでした。自然と心のかよい合いと、み仏さまとの対話のなかに、人びとは生きるよろこびと勇気を感じとったことでした。

最近では、かたちのみが残って、ほんとうの心が失われてゆくような気がしてなりません。手料理をするより、インスタントものが流行する現代生活ですが、そこに働く心もちも大切にしてゆきたいものです。

彼岸



一田善寿

(牛畝)

福岡市正定寺住職
福岡教区教区長
福岡刑務所教誨師

人間は各々その相に依って動作が違ってくるのであります。紋付を着て袴をつけている時と浴衣掛けの時の相のその動作が自然と違うのであります。

これについて「体相用」と申すことがあります。用とは「はたらき」であります。下駄も仏像も同じ木で作られます。下駄は目が三つあっても人の足に踏まれます。しかし仏像は目が一つ少なくして二つでありますが人から拝まれます。

赤土は便所の壁ともなり、人形ともなります。壁に塗られますと汚いものばかりかけられねばなりません。博多人形となりますと床の間に飾られます。

この場合、木は体であり、下駄となり仏像となるのは相であり、足に踏まれたり拝まれるのは用であります。また土が体、壁と人形が相であり、汚物をかけられたり飾られること

熊谷次郎直実と呼びますと関東第一の荒武者であります。が、法力房蓮生と呼びますと法然上人のみ弟子の念仏行者であります。これは同じ人間でありまして、熊谷がお坊さんとなりましたのが蓮生房であります。

熊谷と呼びますと鎧甲いかめしく平家の若侍平敦盛に一の谷の浜辺において打ちまたがり、その首を刎ねている相（すがた）を思い浮べますし、蓮生房と呼ばれば戦争を放棄して墨染めの法衣に鼠色の袈裟をかけられた相で、過去の罪惡に泣き、それを清算するために声高らかに大きな声で、お念仏を申さるる相が現われるのであります。

が用ではたらきであります。

私共の五本の指は五濁（ごじょく）の指と申します。罪惡を作るのはこの指でありまして、ペンを握れば文書偽造をします。刀を持てば人を斬ります。五本の指を握りしめますと拳骨となり喧嘩鬭争の相となります。しかしながら拳骨の五本の指をパツと開いて、両方の掌と掌を合せますと合掌の相となります。私の心とみ仏の心が一処になった相であります。これを結縁（けちえん）と申します。仏と人とが縁を結んだ相であります。

仏と人が結ばれたことは結縁ですが、人と人とが結ばれたことを交際とも申し、つきあいとも申します。交際は人と人との利害が同じである場合は万事都合よくゆきますが、相反することになりますと、つきあいが突き合いとなり、殺し合いとなります。

合掌の相は私だけが倅になったのではない、人様から眺めても美しい蓮の蕾（つぼみ）の相となります。蓮は美しい清い流れには咲きません。穢ない水の中に咲きます。穢なければ穢ないほど美しい花を持ちますように、私共は日々知って作った罪か、知らぬうちに作った罪か、海山ほど沢山の罪を作っている、お経の中には、

一日八万四千の罪を作る

とあります。罪はただ法律上の罪ばかりではなく、道德上の罪、宗教上の罪惡、数えれば数えきれなほど沢山あります。

罪という詞はツツミ・カクスということ、お互いの日常生活は包みかくさねばならぬことばかり、故に釈尊は

ことごとく大地の衆生は十惡を犯す

と、またクリストは

天下一人の義人なし

と嘆かれておられます。

合掌することのできる人は倅であります。また「拾」という字も手へんに合ですから手を合せるとなります。手を合せますと倅を拾うことができるようになります。

水が穢ければ穢いほど蓮は美しい花をかがねることができませんように、人間も道德的に宗教的に、または法律的に犯した罪惡が深かければ深いほど、懺悔し掌を合せて反省する時に人間は更生することができなのです。

即ち掌は体であり、握りしめますと拳骨となり、合せますと蓮の蕾となりますのは相であり、拳骨は鬭争、合掌すれば平和で用でありますから、同じ掌でありますがその相によって用（はたらき）が違ってまいります。

お互の罪惡を懺悔反省し、合掌してお念仏を申す時にみ仏

の大威神力・大光明力に照されて積り——一切の罪も積り——雪が太陽の光りに消えるように罪が消えてしまい、み仏に救われることができるのであります。あたかも十日間かかってよごれたエプロンも洗濯して太陽に乾しますと清浄無垢となります。お経に

念仏するものはまさに知るべし 此の人はこれ人中の分

陀利華なり

と説かれています。即ち分陀利華とは蓮の花であります。親は子を拝み、子は親を拝み、夫は妻を拝み、妻は夫を拝み、嫁は姑を、姑は嫁を互いに掌を合せて拝み合っていることができますと一家中は明るく朗らかに倖になることができます。拝む心が家庭の礎であります。

二河白道一念一步到彼岸

牛 畝

私共三名の教誨師は死刑囚の人々に五重相伝を行なっています。私が勧誡を、そして伝灯師は佐藤学円、回向師は前田秀峰の両上人であります。みんながあまりにも熱心に差入れた木魚をたたいて声高らかにお念仏を申してくれるからであります。教誨堂には元祖さまをまつり「二河白道」の軸もかけています。この勧誡が終るまで死刑の執行が一人もないように祈っています。二河とは二つの河で、右は水、左は火の河が画かれてあります。水の河は貪欲に譬え、右手にあるの

は順境に起るからで、境遇に恵まれている時に起るからであります。金を持っても、もっともっと欲しいと願うから勝手のよい方で、火の河は瞋恚を現すもので立腹を示すものであります。後方に雲がありますのは愚痴を示すものであります。水は貪、火は瞋、雲は痴を示すもので、貪瞋痴の三毒煩惱と申します。

三毒煩惱は眼耳鼻舌身意の六根より生ずるのであります。

即ち眼ある故に見るから腹がたつのであります。耳ある故に聞くから欲が出るのであります。鼻がある故に嗅ぐから喰たくなるのであります。舌があるから悪口を言いたくなるのであります。身があるから怠けたくなるのであります。意があるから疑うことになるのであります。しかしながら仏ましますことを深く信じて念仏申していく人の相を表現したのが火の河と水の河の中間に白く輝く白道を踏んで行く人であります。死刑囚はこの六根により起った貪瞋痴のために大罪を犯したのであります。お念仏を申していくうちに白道を踏んで行く人となるのであります。即ち白道を進んで行く人となるのであります。六根変じて

眼あるために仏を拝むことができ

耳あるために仏法を聴聞することができ

鼻あるために浄香を嗅ぎ

舌あるためにお念仏を申し

身あるために仏を礼拝し

意あるために仏のましますことを信ずる

ことができて、六根常に清浄となり清く明るい生活に入ることができるのであります。

死刑囚の人々は掌を合せ、一枚起請文や小消息も暗誦し、自己の犯した罪惡を痛感し懺悔反省しつゝ、木魚をたたいてお念仏するのでありますが、申すお念仏は誰に振り向けるのか、それは自分が殺した人に回向するのであります。そしてまた、こんな罪深き子を産んだために親族に対して申し訳がないと泣いて死んでいった母上に向けるのであります。人を殺すような子を育てて世間に顔向けできぬと怒って死んでいった父上に向けるのであります。

その御回向の功德に依って殺された人は救われるのであります。亡き父母にも「よくも、こんなになつてくれた、そしてお念仏申してくれる人になつてくれた」と、喜んでもらえるのであります。斯くして死刑囚は告白します。「お念仏を申すようになって、死刑の執行を恐れぬようになりました。死んで彼の国で殺した人と逢わねばならぬと思えば、死が恐ろしかったが、私が申すお念仏に依って、殺した人が救われることができるとは、そうしてまた、私が申す念仏で先き立

ちし親様が救われるとは何んと有難いことかと。

ふところに文鳥温め死刑囚

牛畝

死刑囚の撒く仏飯に寒雀

同

死刑囚仏顔なる彼岸かな

同

かつての凶惡相は全然消えて、身相柔順の仏顔となり、香をたき華をささげ木魚をたたき合掌するその手と、人を殺し殺人罪を犯した手は同じでありまして、体相用を痛観さるのであります。

死刑囚のみな様よ、いよいよ執行の朝が来たならば一念一歩して下されよ、一口念仏申しては一步進んで下されよ。あなたは殺したが、あなたの申したお念仏によって救われた人が待ち給えるお浄土へ、お浄土であなたを待ち在す恋しい母の御もとへ、懐しい父の御もとへ、浄土の再会遂げるため。

釈迦は行け弥陀は来よの中に我

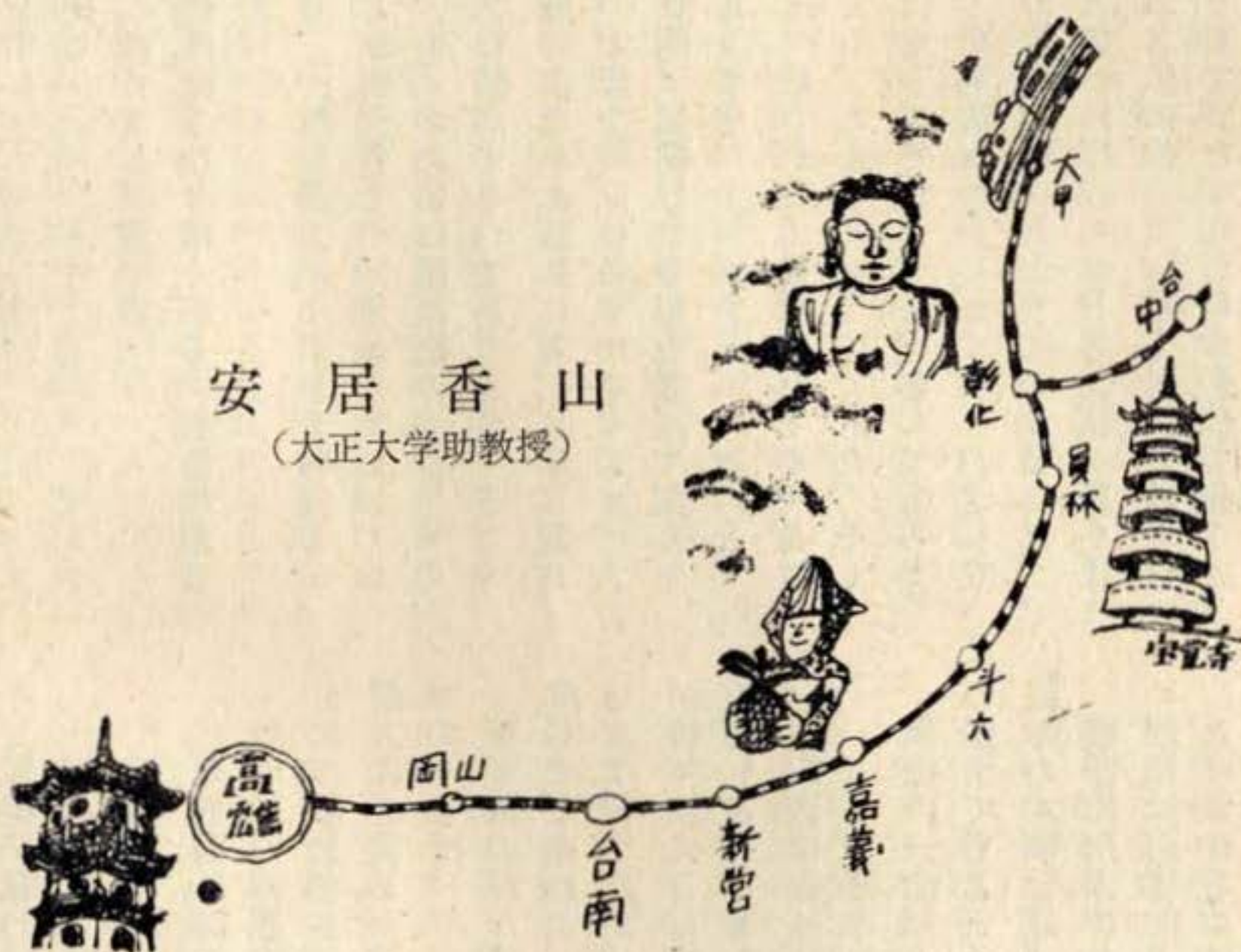
押され引かれてまいる極楽

最後の一念はより高らかに、上は有頂の雲の上、下は無間の底までもとどく如く申されよ、斯くしてこそ西方浄土へ到彼岸の本懷を遂げられよ。

嗚呼死刑囚ばかりが極重惡人と思われるなよ、お互いの心の親様は阿弥陀さま、心のふる里西方浄土の彼岸に到達することのできるのはお念仏申したお陰であります。

春の旅

安居香山
(大正大学助教授)



<台中 宝覺禪寺>

ジェット機で三時間、台湾も冬だというのに、夏シャツ、合服でも結構、汗がにじんで来るのだから、やっぱり南国である。こんな台湾に、親友と二人でこの正月に出かけて行つた。学問と信仰の話は、ここではさて置き、楽しい旅のこぼれ話で、春の旅の土産としたい。

〇くさりかけのバナナ

「このバナナが、一番うまいところなんですから、召し上れ」

台中、宝覺寺の林錦東法師は、上手な日本語でここうすすめた。法師は若いころ、京都

の妙心寺で修行をしたという人だけあって、なかなか日本語は上手である。しかし、すすめられたバナナを見ると、茶色の斑点が一杯で、腐りかけている。

台湾と言えばバナナの国である。台中近郊の何処を歩いててもバナナだらけである。山と言わず、野原と言わず、植えられる所には、皆、バナナの木が植えてある。まさに腐るほどバナナはあるのである。それに、何故に、日本の珍客に、こんな腐りかけたバナナを出



＜林法師と日本人慰霊塔＞

すのか。一瞬私は、この法師の好意を疑った。それでも私は、すすめられるままに、その中でも比較的斑点の少ないバナナに手を出そうとすると、

「それは駄目です。こちらの方が宜しい」と言つて、一番、斑点の多いバナナを法師はすすめた。そして、

「バナナはね、この様にくさりかけたものが、一番おいしいんですよ」

とたしなめられた。そう言えば、牛肉などで



＜バナナを運ぶ人々＞

も、必ずしも新鮮なのがおいしいと言えないことを聞いた事がある。バナナもそうなのかと、やつと法師の好意が分った私は、本当においしいバナナを、たてつづけに何本も食べた。バナナと言えば、私は木の上で鈴なりになっているのを、現地では木から直接食べる位に思っていた。しかし、盛んに切り出しているバナナを見ると、皆真青である。

「木で黄色になったバナナは、とても食べられません」

そんな説明である。話によると、青い内に切り、むろで黄色になるまで待つらしい。百聞一見にしかずで、旅なればの収穫であつた。

○二枚の切符

台湾の汽車の旅は楽しい。どの汽車も、日本と同じ様に正確で、しかも心地よい。普通車、快車（日本の急行車）、対号車（日本の指定急行）観光車の四種に分れている。普通車には乗らなかつたが、その他の車は、どれも清潔で、美しい。それに、一輛に必ず美しい若い女性車掌がいる。これが、又制服もキ



＜汽車の車掌＞

チンとして、旅人の目を楽しませてくれる。
余り美しい人がいたので、ある停車駅で

「一つ記念に、一緒に写真を」

と言い寄ったら、すげなく、

「駄目です」

と断わられた。この時はひどく腹が立った。

「美人だと思ってすましているな」

腹立ちまぎれに、こうも私は考えた。しかし、汽車が動き出すと、先程の車掌がやってきて、ニコニコしながら、



＜台北のホームと筆者＞

「先程はすみません。公務中は駄目なんです」

ああそうか。この人は公務員なのか。いたらぬ邪心も、私の不見識であつたと分つた。ところで、台湾では、どの汽車でも切符は一枚である。日本の様に、乗車券、急行券、指定券など面倒くさくない。それを知らぬのが、また旅人のまぬけである。

「君、向うで普通券を買ってきてくれ。僕は、こちらで快車の急行券を買ってくるか

ら」

そう私は友人に言つて、それぞれで切符を台北から台中まで買ったのであるが、これは完全に失敗。快車に乗るつもりがわれわれは、余分に普通車の切符まで買ったわけである。所変れば品変ることを、身にしみて味わつた一駒である。

○日本語で言え

ここまで書くと、私達は、言葉では何の不自由もなく過して来た様であるが、決してそうではない。台北にいる間は、通訳をしてくれた学生さんがいたので、大舟に乗つたような氣でいたが、さて二人だけで台北を離れるという事となると、心細いこと限りがない。生ず出発の台北駅からが問題である。余分の切符を買つたのも、その第一の失敗であつた。さて切符を二枚も買つてしまったので困つた私達は、何とかこれを払い戻してもらわねばならない。ウロウロした私は、フトそこに警官が居るのに氣がついた。そこで私は、下手な中国語で、恐る恐るやりだした。

「我、我、上台中去……」



＜彰化の大仏＞

私が、ドモリながら、一生懸命、中国語らしいものを言おうとしているのを、けげんな顔で見っていた警官は、やおら私の方に向き直ると、

「わからん、日本語で言いなさい」

と大声で怒鳴った。こんどは私の方が、しばらくけげんな顔をして、警官をまじまじと見ていた。

後が分った事であるが、台湾では、三十六歳以上の人なら、大体日本語ができるらしい。彼等は小学生の頃、その頃は国民学校と

言っただけだそうであるが、日本の先生から、日本語で教育を受けていたのである。そう言えば、台湾は、二十数年前までは日本だったのだ。日本人にとっては、何とも言えぬ悲しい気持ちと、複雑な気持ちが入り交錯する国である。十一日間の旅ではあったが、本当に言葉で困ったのは、数える程で、そんな時には、そこらにいる老人を探せば、大体事足りた。日本人にとっては、まだまだ台湾は旅のし易い所である。

〇ここが高雄駅ですよ

しかし、そうは言っても、そこに老人や、日本語の分る人がいない時には、全く困り果てる。台南から高雄に行く車中では、私達の囲りは、皆若い人々ばかりであった。やっと片こととの中国語と、筆談で用を足していたのであるが、たまたま私の話していた二人の若い女性は、高雄の一つ手前の岡山という所の夜学に通っている学生であった。その二人が降りて行ったので、私達はそれがつき

り岡山で、次が高雄であろうと予想していた。

「次は高雄だから、準備をしよう」

私はそう友人を促した。ところが降りた二人の女性が、窓越しに盛んに手招きして降りろという。やがて、女の車掌も来て、何やら分らぬ中国語を言いながら、追い出す様な手まねをする。

「おい、乗り換えらしいよ」

私は、急いで荷物を取りまとめてホームに降り立った。先程の女性が、階段を降りてあっちへ行けという。言われるままに行ってみると、改札の出口に来てしまった。

「変だな。次の汽車まで待つのかな」

全くわれわれはとまどってしまった。いささか腹を立てた友人は、高雄まで買った切符を振りかざして、たまたまやって来た駅長らしい人に、

「私達は高雄に行くんですよ。この切符を見て下さい」

と怒鳴るように言った。駅長らしい人は、それをけげんな顔でのぞきこんでから、後の方の駅名の書いた札を指さして、

「お客さん、此処が高雄の駅なんですよ」

言われて見れば、成程高雄だ。中国語が通じないで頭に来ていた私達は、とんだ感違いをしていたのだ。

二人の若い学生は、実は高雄の人で、岡山の学校に通っている人であったのだ。それをいつの間にか二人は、岡山の人とばかり感違ひしてしまったのだ。言葉が通じぬと、こんな喜劇も起るのだ。

○八ッ目うなぎ

高雄では、言葉の通じぬ為の失敗が数々あった。予定していたホテルの名前が、なかなか通じないので、運転手に池の絵を示して、その辺りのホテルだと教えたら、

「分りました」

と中国語で答えた。安心してタバコをくゆらしている、

「ハイ、着きました」

という。もっと遠い筈なのに馬鹿に早いので驚いた。窓越しに見ると、確かに池らしいものがある。しかし、釣堀りの様なもので、とても池とは言えない。われわれは、清澄湖を考えていたのに、下手な池の図を示した為



<清 澄 湖>

夕食は高雄の町でと思い、ホテルに荷物を置くと大急ぎで高雄に出かけた。運転手に、適当な食堂を案内されたが、日本語は全然通じない。止むを得ずメニューを見て、一番値段の高いのを注文した。高ければ美味しいという素朴な判断からである。

出て来たのを見ると、黒い色をした推茸の様なものを細くきざんで煮てある。「これはうまい」二人は、減った腹に、どんだんながし込んだ。通りかかったボーイさんに「これは何だ。野菜か、動物か」「魚です」「なに？ 魚」

二人は、思い直したように、目を大きく開いて、その細長いものをよく見た。そこには確かに小さな目が光っていた。

「こりゃ、八ッ目うなぎみたいだぞ」

そう思うと、もう私は箸が出なくなった。私は余りどじょうのようなものは好かないのだ。

に、ハイヤーの運転手は感違ひしたのだ。改めて、

「清澄湖の辺りの西湖大飯店だ」

と筆で書いたら、やっと運転手は分ったらしい。そこまでは、更にハイヤーで十五分もかかった。日は暮れて清澄湖は見えなかったが、やっとねぐらは見つかった。

「こりゃ、栄養がありますよ」
友人は、そう言いながら、とうとう残りのものを平げてしまった。私は止むなく、野菜スープをすすった。

○仏に生命を救われる



△宝覺寺の弥勒仏▽

台中の宝覺寺を訪ねる前から、私達はいろいろとスケジュールを考えた。そして、高雄から飛行機で、東海岸の台東に出ることにした。林法師は、切角来たのだから、一晚台中に泊れという。言われるままに泊ることとし、その夜は台中の町をいろいろと案内頂いた。

「仏教会の後援会長にも紹介します」

そう言って、住職はある電気器具店に案内された。日本語の上手な主人に、いろいろと接待され、土産にということ、民国元年の一元銀貨と、仏教会のお守りだという事で、マンジ模様の入った美しいバッジを二人に着けてくれた。

ところが、間もなく、高雄、台東間の飛行機が、大武山に激突し、十九人の乗客全員死亡のニュースが、全台湾をゆるがした。その中に日本人観光客が、五人もいた。私達は、その次の日に乗る予定だったのだ。

「台中で一泊しなかったら、私達もあの飛行機と行を共にしたかも知れない」

今更の様に仏像の有難さを知り、バッジのお守りの功德を感じた。高雄からは飛行機を諦めてバスで五時間半もかかって台東に出た



△台北竜山寺▽

のであるが、バスの車中、私は静かにバッジを手で押えて、吾が身の保護を念じた。

「このバッジは、お礼に今年一年間着けることにしよう」

そう誓った私は、今もそのバッジを肌身はなさず着けている。

話

法

白道をあゆむ

一

紅、紫、緑、青などとならべてみると、美しいという心もちが湧いてきますが、白というと、美しいという感じと共に、主として清らかな、清浄な、という感じがおこってきます。それゆえに、白き道というと、清浄の道、清らかな道ということに譬えられるのであります。無量寿経には「清白の法」と説かれております。すなわち、清らかな白妙の道、白道のことでありましょう。

本来、清いといいますが、清くないものに対する意味であります。どういうものが清くないへ穢れた道かといいますが、貪欲は穢れであり、瞋恚はあさましいもの、愚痴の心は困ったものというような、三毒の煩惱をさすのであって、これらに対して、白き道が示されるわ



上原貫道

けであります。

この清浄の道は、人間の本性からいいますと、「真性」とも「仏性」とも名づけられるものであります。心のなかには、美しいことをしなければならぬ、他人を傷つけてはならない、などと思ひ念ずるのは、とりもおさず清浄の道ということができましょう。

經典によりますと、この清浄の道は、幅四五寸ばかりとありますから、ほんの僅かなすがたを人間の眼のまえにあらわしているのにすぎません。それに反して、貪欲の河、瞋恚の河は、広く深く果しもない有様です。

いま、浄土教の上から申しますと、この清浄の道、即ち白道は願往生心にあたるのであります。すなわち、わたくしどもが、阿弥陀仏の心のまします浄土に往きたい

と願う心を申すのであります。

二

平生自分の憎いと思っている人に対面したとき、自分の心も、おそらく醜い姿をしていることでしょう。可愛いわが子に向っているときには、親の慈ぐみの姿をうるように現わしているものでしょう。その相對するものによつて、自分の心を変えるのが人情の常であります。いま清らかな如来の浄土を願う心がおこりますと、わたくしどもの心も、自然に清らかになります。

この浄土を願う心を白道に譬えたのでありますが、又、浄土を願う心は、僅かに、この世でわたくしどもが、御縁にあずかっておこす幅四五寸の道に譬えられております。しかし、腹立ち、慾望に充ちた心というのは、オギヤーと生れたときから、死ぬまでの一生涯にはびこりついているのであります。無始の熏習と申しまして、生れたときから本能的に乳をさぐるとか、眠るとかという欲があります。誰も教えこまぬのに、自然と呑みたい、眠りたいという心を起しています。腹立ちの心も誰かに教えられてもつようになるのではありません。すやすや眠っている赤ん坊を可愛いと思つてゆりおこせば

ワット泣き出す。やはり赤ん坊ながら怒っている姿であります。實際上、わたくしどもの身体のどの一部分を傷つけても血が出るように、わたくしどもの心は、生まれると同時に、全部が欲に覆いつつまれているのであります。

ところが、極樂を願う心というものは、この世ではじめて私どもが御縁に預つて起すもので、しかも、僅かな道巾にたとえられているくらいです。諸欲の事柄は、命がけでやるという人間も、仏の慈悲の廣大無辺の念仏のごとき信心は、なかなかおこしがたいのであります。

本来、この白き道を渡っている人の姿をみますと、白き道を一步一步踏みしめながら静かに進んでまいります。白道を一步一步歩いているからといって、それが自力で歩いている譬えにとつてはならないのです。ひとえに仏の願力をたのんで念仏相續する有様を、人間の歩いていることに譬えたものと、心得えていただきたいのです。

三

歩む道は白道、これが大切なことであります。いくら

道があつたからといって、歩むことがなければ目的に到達できないし、またいくら歩いても、目的地への道が無ければ、迷うばかりです。これを心行具足と申しまして、念仏を申すには、必ず信心があり、信仰の道の上には、必ず念仏の唱名ということが実行されるのであります。

このようにして、念仏生活は腹立つ焰にも、やかれず、妨げられず、欲の波にもけがされず、水にも火にも白道は厳として、如来摂取の力が漂って、慈悲の波が波立てばたつほど精進の勇を増して一筋に進みゆくのであります。

この心行具足ということが、往生楽楽の目的に達する大切なことでありまして、なおこれを譬えてみますと、列車にのっている人の姿を眼にすれば、それがそのまま心行具足の姿になって映じます。乗って腰かけている姿が行であつて、その腰かけている人の心の中には、この列車に乗ってゆけば、目的地へ行けると信じているのが安心であります。その乗る行と往けると信ずる心とが一致しているわけでありますから、これをそのまま心行具足の姿と譬えてよいわけであります。

念仏さえ称えれば、如来の慈悲に救われるし乗りこん

だその時から、列車にたすけられて進みゆくように、「約束の念仏は申候よ、やろうやらじは弥陀のはからい」、なのであります。

念仏を申しはじめたそのときから、摂取不捨の大慈悲大悲の中には、生きてゆくのが、往生極楽の大目的を有する仕合せであります。

これを同時全音の利益といいまして、拍子木を打っていたら、二、三年たつてはじめて音がするというのはなく、二つの木が打合れた瞬間に音がするのであります。

南無阿弥陀仏を称えるところに応声即現の利益を蒙るのであります。即ち理想は、往生極楽というように遠大なものであるとしても、実現は、声にそこに生かされ、助けられ、恵まれつつ白道をあゆむわたくしども人間の姿をさすのであります。如来の恩光に護られながら、どんな烈しい炎の煩惱の真只中にあつても、きわめて楽しい力ある人生を進ませていただき、あたかも太陽の東山に輝き出で、夕べに美しい夕日の輝きのなかに暮れてゆくように、わたくしどもは、よろこびの中に生きて、よろこびの中に働かせてもらい、夕日の輝くあかるいこの世から、さらに明るく浄土に往生の素懷をとげたいと思う次第であります。

十二因縁

—その3—



現在利益のお名号（識）

渋谷 賢 応

（長野県茅野・心光寺住職）

十二因縁の第一の因果が無明と行とであったと同じように、第二の因果として識と名色とを考えることができます。無明が人間性の底にある迷界に入る起源であり、その果として迷いの行動が衝動的に働いて行為としての行が現れるように、迷界の主観として働く意識の作用を識と言ひ、その客観となるものを名色と申しているで、古くより識は了別の義であると申されておるのでございます。

従来の先徳は、この識よりはじめて名色、六入、触、受を

一つのまとまりのある因果として考えているようですが、やはり無明と行とが一つに区切られると同様、識と名色とは対応して一つに区切られるべきもので、ただこの場合の因果は同時に相応するもので、前者のように無明によって行が生ずると言うようなものではなくて、識たる主観は名色たる客観あつてはじめてあり、名色たる客観は、識たる主観によってはじめて認識せられるものなので、相関性をもったものであつて「これあるが故に、彼あり」と言うように、縁起の基となるべきものと思われまゝす。

しかもそれは迷界の識と言うことで、善知識などと申す識とは全く異つておるものです。私たちが思惟し得る、また行動し得るあらゆる悪行の集約せられた主体とでも申しましようか。無明が人間性の根本に根ざす素因とするならば、識はこの私の人間性の主体とでも申すべきものなのです。その故に、「識こそ苦の因」として十二因縁のすべてがこの識に帰入し、この人間苦界の縁起の内観を、この「識」を「智」に転ずることを以て修道の道標とせられた先徳も数多かつたわけで、私の内なる妄心の根源、識を縁起の滅観に於て滅することこそきびしい修道の道程であると考えられたわけですから、事実、仏教修道の方法によって各宗各派が分れ、分れることによって迷いを生じ、また争いを生じたと言うこともこの

識をどのようなにとらえ、解決するかと言う苦心のあらわれでありまして、我が法然上人も、浄土宗をお開きになるまでどれ程この道を求められ、お開きになった後においてもどれ程このことに心をおくだきになったか、はかり知れないものがあるのです。

「理観、菩提心、読誦大乘、真言、止観等、いづれも仏法のおろかにましますには非ず。みな生死滅度の法なれども、末代になりぬれば力およばず。行者の不法なるによりて機が及ばざるなり。」

「仏教の哲理を研究し、観音菩薩と同じような心をもつ、たく山のお経を勉強し、ダラニをおとなえして心を静め、座禅によって自分の心を内観するなど、みな仏法の大切なことばかりです。みなさとりにはいたる法ではあるけれども、今の私には人間の弱さが先にたち、私の機根がとてもそこまで及びません。」

と申されておられるのもこの識の滅観の法を申されたものに外なりません。あの如来の応現かと称せられた法然上人においてこのおことばです。それ程に識の滅観はむずかしく、行じ難いものであると申せましょう。

○

百喻經に次のようなお話がございます。

「昔、愚かな子供がありました。大きい池のほとりに立つた所が、その中に金色の像があるのを見ました。早速中へ入って泥だらけになってそれを求めましたがついに見失ってしまいました。疲れ果てて岸边に立ち水の澄むのを待ちますと、またそこに金色の像があるではありませんか、すぐに飛び込みさがしもとめました。いたずらに泥にまみれるのみにて金像を求めることはできませんでした。その父が子が帰らないのでさがしに来てこの有様を見ていました。『お前は何をしているのだ』『私は水中の金像を求めて泥をこねまわしてさがしていました』父が上を見ますと樹の枝に金像があるではありませんか、『お前が求めている金像はあの樹の上にあるではないか、それが水中に写っているのを水中にあると思つてさがしても見つかるはずがない。きっと鳥が金像をくわえて来て樹の上に置いたものだろう』そう言つて樹から下して子供に与えました。」

そしてお経は次の如く結ばれています。

「凡夫、愚痴の人、無知の人も同じことです。本来無我なる、縁に因つてのみ心の動く自分の体や心に、真智を求めますがきます。泥にまみれて。ちやうど子供が水中の影を求めするように。いくら苦勞しても無駄なことなのですのに。」

真智を外におき、識を滅する法を内に求めず。迷識の中に

眞智ありと思うは外なる如来の影のやどり給えるものと思うとき、この一見幼稚な寓話の中に不拔の眞理をさとらずにはおられません。

○

「われ仏を念ずれば、仏我を照し給う。光明われを照さば罪障きえずといふことなし。かくばかりの行を、無数劫のあひだ思いよらざるかなしきよ。時過ぎたる智恵禪定を修せんよりも、利益現在なる光明名号を称念すべし。一行すなわち一切行なれば、念仏の一行に諸行ことごとくおさまリ、一念すなわち無量念ならば、一称弥陀なにの不足かあらん。」

大原問答以後、法然上人に帰依された、後の天台座主顕眞法印が、叔母の禪尼にお念仏をすすめられたお手紙の一節です。

「我ら仏を念ずれば、仏我らを照し給う。弥陀の光明我らを照さば、我らの罪障はたちまちに消えてしまうのですよ。ただこれだけの行を、この長い年月学びながら、修行しながら、思いいたらなかったことの悲しさよ。もうこの末法の世において、どうにもならない智恵禪定を修するより、現在ただ今のこの私に、心のともし火となりご利益を与えて下さる口称のお念仏をおとなえしなくて何んとする。一声のお念仏、その中に諸行はすべておさまっているのです。このこと

を行ずるに何んの不足がございましょう。」

後に天台座主ともなれたこの法印のおことばは、浄土門の人のことばと同じではあっても、また別の力強さを私に与えてくれます。お釈迦さまの内証たる、識に要約せられる十二因縁の、その迷識を滅するに、今はすでに末法の世、現在の私に合わざる修行の法よりも、また、今はどれ程苦しくも、この修行をおし進めてゆけば、将来必ず人間の迷識を破るであろう修行よりも、一声の称名により、その声の中にすでに利益のある念仏の大道がいかにすばらしいものであるか。

勿論この場合のご利益は、世に言う現世利益ではございません。弥陀の光明に会ううれしさ、純宗教的なものと申すべきでしょう。

○

そしてこれこそ、浄土の門の最もすばらしい卓越性です。現在浄土の門を評する人の言葉に、浄土門は現実性を欠き、将来あるかないかもわからない浄土を想定してそこに往生を願う愚劣さを、したり顔して指摘する人がございます。何んの物的利益をともしないことのない念仏行を非難する向きもあります。しかしながら、この純粹の意味に於ての「利益現在なる光明名号」を体認せられてのことばなのでしようか。



昭和仏教全集

第四部 2

——林 靈 法 集——
『仏との出会い』

数年前から、教育新潮社より全百巻を目標として、「昭和仏教全集」と銘打たれた異色にして且つ私達仏教を思い念ずる徒輩にとつては誠に待望のシリーズが、続々と出版されるに到っている。『仏との出会い』——林靈法集——もこのシリーズの中の一冊として既に刊行されている。著者林靈法氏については、既にして御承知の方が多々あられると思うのだが、特に戦前においては「新興仏教青年同盟」の指導者として新仏教運動に身をもって活躍された人であり、現在では東海高等学校長や東海女子高等学校長などを歴任されて、宗教情操を根底とした人間の教育に日々努力されている人なのである。

さて、本書『仏との出会い』を今この誌上

に紹介させていただくのは、本書が著者林氏の特異な体験をもとに、類い稀なる清浄堅固の宗教理念とその質実賢明な宗教的実践とを、鮮やかに吐露しているからである。本書は林靈法氏が私達凡夫徒輩の理解の為に書かれた信仰の手引きの書である。そして、それは氏自身の遙かなる想いを秘めた求道の書であり、更に言えば、氏の幽暗なる獄中の手記である。言うなれば、留置場と拘置所にあつた一年有余半の未決の生活における「絶望のどん底から、法然上人の浄土教信仰によって復活更生」するまでの氏の切々たる告白の一書である。

「新興仏教青年同盟」とは、妹尾義郎氏を委員長に且つまた林靈法氏を書記長にして、

昭和十年前後、時局の流れから国家権力からの弾圧を喰うまで、同胞信愛の理想実現の情熱を標榜として、反宗教運動への排撃と貧民救済などを綱領に掲げて、総体的には全仏教的理念に基づいた社会改革運動を主眼として起った、全く自由な思想に裏付けされた宗教組織であつた。それは、本書において氏が再三再四述べておられるように、例えばマルクス主義の思想理解の為にそれらの解明に誠心誠意勤（いそ）しんだとしても、決して単一の狭い料簡に溺れるものではなかったようだ。

しかしながら、軍国絶対主義の時流のもとに遂に検挙され、氏はいよいよ獄中の人となつてしまったのである。「人生のなかば三十

の年から数年にわたって拘束の身となつて、その間にかけがえのない両親を亡くして、その憤りや悲しみ、そして、その苦悩は」と語る氏の憂鬱、焦燥、憤怒、失望といった思持ちは全く悲痛限りないものであつた。なかでも、獄中にある氏を残して、

今日はそれをいいにきたのだよ。それをな。お前、これからな、どんなことがあつても、これ（合掌）一つでやつてくれ、これでな、これでな。これだけを今日はお前にわざわざいいにきたのだよ。

と、いつまでも合掌しながら面会に見えた、尊敬してやまない慈父の突然の死。そして、愚痴一つさえこぼさぬ優しかった慈母の言葉はこうであつた。

お前はほんまに罪つくりの人間や。

ただ「すまぬ」という熱いものが胸に込みあげた、という氏の悔恨ただならぬ念が深い疵痕として残つた。そうして、この母にしては数カ月程して父を追うようにして他界し

てしまったということなのだから。

ほろほろと鳴く山鳥の声きけば

父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ

この行基菩薩の歌が、虫の鳴く音を聞きながら、ふと幼い日々を思い起して、その遣る瀬ない心情のもとに静かに思い出されている。呵責の念と憔悴の内に悩み苦しむ氏の想いがこの歌に凝縮されているかの如くである。

人は孤独にあつてのみ神の声をききうるし、ほんとうの自己を発見しうるものである。孤独は魂を浄化する。孤独に堪えうる人にして、はじめて真の人生にも徹し、また人間的な恩愛以上に、宇宙的な絶対的にまで生きうるものであらう。

氏の獄中での感慨は、悲しみと苦しみに満ちた数々の事象を通して、悔恨と苦悩、読書と合掌坐禅の内に繰り広げられる。更にこのことは、「いうべからざる煩悶懊悩を、信仰の一念によって辛うじてせきとめてきた」とまで語らせるに到るのである。氏は述懐して

いる。

私はいま独房に端座し、合掌しながら思う。この世の中で一番に人間の尊い姿は、人の子の懺悔合掌の姿であらう。

私は確信する。われらひとしく如来の慈光に浴し、天地の大生命に生かされおるとの一大感激に奮いたつてこそ、はじめて家を越え民族を越え、怨親ひとしく浄められ、人類共存の榮は光り輝くものとなることを。

誠に本書は、言わば思想犯として捕えられた氏が、その経験と記憶とを頼りに、人生への深い思慮と反省の念を育て、自からの再生を企てた求道の一書なのだ。幸いに、本書は氏の青雲時代の若き行動にも詳しく触れられている為に、読者の理解を一層のものとしている。また、これとは逆な意味で、結びとして付け加えられた書簡が、最近の氏の心の在り方をよく捉えていて、私達を肯ずかせてくれるのである。（教育新潮社刊価六〇〇円）

ハガキでひとこと

彼岸の思い出



で長男の私を生み、六人の母とし寺庭の婦人として多忙な日々を追われながら、毎晩の勤行を欠かすことなく四十三歳で臨終行儀も如法に生涯を閉じた母の不言実行の像を私は今もなお大切に胸にだきしめている。

小林 忍 戒

(京都聖光寺住職)

母の像

菊地 謙雄

(神奈川教区教区長)

彼岸になると思ひ出すことではあるが、三

十数年前に四十三歳の若さで亡くなった母が、十八歳の若さで私の父の小さな寺へ嫁いでから誰から受けついだのか、春秋の彼岸の前日、きまったように花柄だんごを作ってみ仏に供えていた。米粉をねって白色のまま薄くのした上に、赤、青、黄等色々に着色した棒状に延した米粉を中心に置いて片側から、あたかも海苔巻のように巻きあげてフカンあ

げ、戸口から三厘厚みに切ってゆくと白い輪の中心に色美しい花模様を浮べた花柄だんごが出来る。それを高つきに盛り上げて仏前に供する。甘味を少しきかせた此のだんごを如何程喜んだものか。今も母の匂いを彼岸に感ずることである。

私の生れた寺では朝の勤行は父、夜は母の受持で、私は三歳位になると毎晩母に伴われて仏前に坐らされた。「あんたは此の寺を襲ぐ大切な子だから仏のお子じゃ」と、後から次々に生れた弟妹とは格段の好遇を受けて育てられた。

「仏のお子」と常々いわれた私は子供ながらに自重の毎日を送ったものだった。二十歳

お彼岸ともなれば、我が身の修養を第一に心がけるよき季節であり、また亡き人を想い報恩感謝の誠を表して、仏前に、墓前に経を誦し、香花を供え念仏する。その姿は都鄙の別なく、老若男女の差もなく、独り又は家族連れを見るのである。

亡き人の冥福を祈念し、我が身の不幸を訴え、あるいは家族の繁栄を喜びて合掌する。自分は両親の因縁によりて善かれ、悪かれこの世に生を受けて存在する。両親もまた各々の両親によりて存在する。それを想うと自分の存在、生命の根元は果てしなく無量無数の人の生命が連綿として私を保持している。自

分の生命もまた、子孫に連綿として存続していく。

地上に於ける人類の発生は凡そ七億年の歴史の中にあるというが、全く生の由来、生の終りを知らず、自分そのものが祖先と子孫の間にあるということを思うとき、亡き人を拝み、子孫を祈る自覚を持つ人間にならなければ、「今日 彼岸菩提の種を蒔く日かな」にはならないであろう。

勝沼千代子

(東京都練馬区在住)

七日間の彼岸は私達にとって誠に日頃の垢を洗いおとし前進するために、もっとも大切な行事だと思います。

浄土宗門徒の家に嫁して間もなく春の彼岸会を迎えた時、姑から仏様への御供養、お寺でのお施餓鬼、お別時と、おだんこの作り方、綺麗にお皿にもる方、心が丸いとおだんこも丸くできるのだよと、やさしく教えて頂いたのも昨日のようになつかしい思い出です。

四十年もたつてしまいました今日、社会の波風にあい、お念仏の有難さ、尊さも心にしみ渡って、私の人生で一番うれしいこと、恵まれていることはよき師に恵まれ、念仏を申させて頂けるようになったことです。

寒い冬から次第に温かい光につつまれ、草木が芽を出し、早い彼岸桜がちらほら咲き初め、大自然のお恵みが心に、肌感じられ、私達のすべてを育てて下さる如来様のお慈悲に感謝させて頂きます。

津島路子

(愛知県岡崎市在住)

「到彼岸」かの岸へ至るということ、これを理解いたしますことは大変難しいことと、五十過ぎた今日、歳をとるにつれて感じられてなりません。と申しますのは二十九年前に祖父が亡くなり、間もなく春彼岸を迎えた時のことです。その中日が丁度二七日に当りましたので、家族や親戚の人達と連れだち寺に参りました。その折住職様より彼岸について

いろいろと話しを受けたまわりましたが、たまたま肉親の死間もない時でしたので、その話しが何か強く心に残りました。

「彼岸に先祖の霊を弔うのは当然ですが、現に生活している私達一人一人が人としてなすべき道、六ハラミツを自分なりに理解し、でき得る範囲内で精一杯努力すれば、おのずと自分の人生が開けてまいります」

住職様の話しはこのあと六ハラミツについて分りやすく説明して下さいましたが、私も私なりの解釈でこの話しをもとに、それから後の生活の中に少しでも反映させようと決めてまいりました。

しかし一日一日の生活は忙しさや周囲のさわがしさのため、ついつい感情に走り、施し心に欠け、自己を反省するまで至らず、耐えきれず、正しい行ないができず、心が静まらず、真実をきわめる心に欠けてしまいます。つまり六ハラミツを頭の中ではえがき得ますが、素直に行動の中に反映できないのが常々でございます。

けれども残された日々を少しでも満足のできるものにと感えながらの頃々です。

童	聖
話	典

あらいそい
闘争を止めよ ①

お釈迦さまが、有名な優填王の統治していたヴァンサ国の首都で、当時のインドの六大都市の一であるコンサービーにおられた時のことでした。

コンサービーの比丘たちがほんのさ細なことから二派に分れ、それにつれて比丘尼も二派に分れて闘争をなし、そのあらそいが次第に大きくなり、果ては双方入り乱れてなぐり合いをするほどの事件が起ったのです。お釈迦さまは再三と止めようとされましたが、彼等はお釈迦さまの誠めと制止をもきき入れようとせず尚もあらそいをつづけましたので、終にお釈迦さまはその地を去られ舎衛城の祇園精舎へ立ち帰られてしまうようなことが起ったのです。

この事件は一説では、こんなつまらぬことから起った



つるた たんせん

ともいわれています。戒律もよく守り聡明で他の比丘に説法する資格のある長老の比丘が、大便の用をたしてお尻を洗った水をうっかりして少し残しておいたのを持戒堅固に修行している長老の比丘がたまたまこれを眺めて、それは一つの罪を犯したことになるから懺悔しなければならぬと警告したのですが、その比丘は、自分は罪であることを知らないでやったのであるから、懺悔する必要はいささかもないと主張したことから始まったともいわれています。

その比丘は比丘たちの意見をきこうとしてこのことを比丘たちに語りますと、或る者は有犯といい、他の比丘は無犯といって二つの意見が対立してしまいました。

無犯と主張する比丘は、

「おんみは、戒律を犯してはいない」

といってくれたので、その比丘は戒律を犯した気持は微塵も持っていないませんでした。

ところが一方、有犯と主張する比丘は、

「おんみは戒を犯した。それ故に自ら懺悔すべきである。梵行を汚染しておきながら人々から信施を受けてはならない」

ときびしくいしました。

「わたしは戒律を犯してはいません、それにどうして懺悔する必要があるでしょう」

こういってその比丘は拒みました。

彼は自分のあやまちを告白懺悔しようとしなかったのだ、戒律を犯したと主張する比丘たちは彼の作法の不正を挙げて、布薩や自恣など色んな僧としての行事を一緒になすことを禁じた上、仲間から除いて別に住せしめて反省を促がそうとしました。

戒律に少しも背いていないと思っている彼はこの処分を不服に思い、コンサービー城内にいる比丘たちに応援を求めようとして、

「わたしは戒律を犯していませんのにかの比丘たちは強いてわたしに罪ありといい立てて、一緒に住してくれ

ません。諸大徳子どうか法の如くわたしを救助下さい」

と願いました。

ついで城外に住んでいる比丘たちのところへも行つて、同じように助けを求めたので、彼等もその比丘を応援することになりました。

その頃、コンサービーでは比丘の闍那が巾をきかせて、比丘たちの主領株となっていました。彼はもとカピラ城の大臣で弁説もすぐれていたので諸家に入出入して法を説き、ヴァンサ国の大臣や富豪等に崇敬され多くの信者がありました。その上、国王の優填王から親友のような殊遇を受けていたので比丘たちの間に大きな勢力を持っていました。もともと闍那が出家した動機は道を求めようというような殊勝なものではなく、比丘になれば人々から崇拜せられ、多くの財物の供養を受けられるからという全く不純なものであったといわれています。彼は優填王の庇護があるといううぬぼれから日頃から傲慢で、他の比丘と法を談ずるような場合でも、相手を屈服せずにはおかないという態度に出ましたし、又、比丘と好んで論争を行いました。ですから比丘たちは、彼に対して畏敬の念と共に少なからぬ反感を抱いていました。それ故に、彼の行為に日頃から心よく思っていない比丘も多

数いました。

こうしたことから比丘たちが二派に分れるようになり
ますと、闍那は比丘尼たちをも自分の味方に引き入れよ
うと説得しましたので比丘尼たちも二派に分れ、ここに
比丘と比丘尼が一同となり徒党を組み、他の比丘と比丘
尼と相対立して双方で激しい鬭諍をまき起すこととなっ
たのです。しかし、この時、闍那はどちらへ味方したか
は、分明ではありません。

教団の不和は破僧または破和合僧といって教団を分裂
さすことは、最大の罪悪でお釈迦さまも五逆罪の一つと
して、きびしくいましめられていました。混乱も一時的
のものと思っていた争いが根深いものとなって来ました
ので、戒律をよく守り真剣に修行していた長老の比丘は、
何とか和解させようと双方に説得につとめましたが無駄
でした。その比丘は自分の力では到底解決が出来ないと
考え、お釈迦さまのみ許に行き、ことの次第を詳しく申
しあげ争いを止め下さるようお願い出でました。

するとお釈迦さまは、直ぐ比丘と比丘尼を集められ、
きびしく呵責されました。

「比丘たちよ、そもそも国王のために道を求めている
のか。それとも、この世を恐れるがために道を修めてい

るのか」

「違いまする、世尊！」

「考えるまでもなく、おんみらは生死を離れ、悟りの
道を求めようとして修行しているのではないか」

「さようでございまする、世尊！ 世尊の申される通
り、わたしらは出家学道いたしました所以は、悟りの道
を求めるためでございまする」

「比丘たちよ！ 道を求めていながら、おんみらの所
為は非である。沙門の威儀ではない。沙門の法ではない。
浄行でない。してはならぬことである。どうしてコンサ
ービの比丘は、道を求めていながら共に諍い、比丘は比
丘と諍い、比丘尼は比丘尼と諍うのか。闍那比丘よ、な
ぜ比丘のみでなく比丘尼を誘うて徒党を作るのか。たが
いに罵詈雑言をして不和、別住して諸の塵垢を生ぜしめ
ている。おんみは正しくこのことを畏るべきである」

「世尊！ 御心配なさらないで下さい。世尊は法主でい
られまする。比丘らが鬭諍することの過であることは十
分存じていますから、わたしどもで解決いたしまする」
といって闍那比丘は、神妙そうに頭をたれました。

しかし闍那比丘はこう申しあげておきながら、比丘た
ちは一向にあらそいを止めようとせず尚も互ににらみ

合っていました。食事のとき大勢が食堂で一緒に食卓についた時でさえ顔を見合えると、その比丘の無犯か破戒かについてむし返して口論が始まりどちらもゆずろうとはせず、互に声高に口きたなく罵詈雑言あい、果ては腕力沙汰となつて入り乱れてなぐり合い、誰れ一人それをとどめることが出来ず、事態は一そう険悪な雲行きとなつて来しました。

その場に姿を現わされたお釈迦さまは、

「さように互に罵詈雑言してはならぬ。食事のとき高声してはならぬ。犯すものはみな突吉羅（わるいわざ）である。あい打つものは儉羅遮（重罪）である」と呵責されました。

その場はやっと静かになつて食事が終わりましたが、しかし彼等は尚も争いをやめずに二派に分れて相い敵視し布薩や自恣の行事を別々に行うようになりましたので、お釈迦さまは、更に訓誡されました。

「比丘たちよ、やめるがよい、やめるがよい。おんみらは鬭諍し更におい互いに誹謗し、あい罵詈雑言してはならぬ。よろしく共に和合して水乳のとけ合う如く一処に共に住して共に師の教を弘むべきである。如来の法によって平和に住せよ」

「世尊！　どうか御心配なさらないで下さい。法主よ、時を待ちたまえ。口論のことは十分存じておりますから、わたしどもで解決いたしまする」

と闍那は答えるのみでした。

このときお釈迦さまは、

「比丘、おんみらは鬭諍してはならぬ。若し諍を以て諍を止めようとしても止むることは得ない。ただ惡のみよく諍を止む。この法を尊重すべきである……」

それから諍々とうつぎのような物語をなされました。

むかし拘薩羅という国があったが、その国は小さく国力も微弱であつた。しかし国王の長寿は聡明で、文武の道を極め音楽にも通じていた。その隣国の迦尸国は強大で、野心満々たる梵達王は国威を上げようとして漸々他国を侵略し、拘薩羅をも手に入れようとしていた。拘薩羅国の兵士は武勇もすぐれていたが兵力が少なかった。ので、圧倒的な敵兵に対抗することは不可能に思えた。それ故に敗れて降伏するよりはと、長寿王は妃と共に僅かの兵に守られて車に乗り都城を出で波羅捺へ逃れ、深山に身をかくした。こうして梵達王はわけなく拘薩羅国を併せ奪つてしまった。

（続く）

業をみつめて



松川文豪

(聖橋高校々長)

永いこと学問から遠ざかった私ですので、これから申しあげることとは諸大徳方のご失笑を買う結果となるかと存じます。従ってこの文を書かせて頂くに当り、いろいろ考えさせられました。そして今更のように釈迦の偉大さと法然を初め、各上人の頭脳に驚嘆させられるばかりでした。私は本誌前号で、

①無常観、無我観の理解し得られなくなつた現代

②個人が没却されつつある時代、

の二つの大きな特徴に対し、どうあるべきかが現代仏教に於ける課題ではないだろうかと思ひました。その二条件を除いたら仏教の真生命がなくなってしまう。だからそこへどのようにしたら戻せるかというような論議では後向きのように思われます。

無常観や無我観にかわって人々の「知恵」となり「こころ」となり得るもの、個人にかわって組織・集団に於いても導びかれなければならぬ。

仏陀の教えとは何んだらうか。

現代人が歩こうとしている「有」「我」に對して仏教ではそれを假有であると考え、思ひます。

假有であるということは実有なものが存在するということ、假有が假りであるから虚無であるということではない。実有とは永遠なるもの、無限なるものであり、假有なものである。

①その有限なるものを、有限の中でそれだけに生きる生き方

②無限なものに近づけようとして生きる生

き方

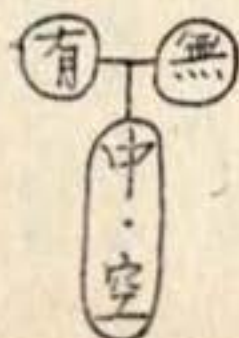
③つねに有限を無限なものの仮りの姿、一コマであるとして生きる生き方

をする人々がいると思う。
実有なものとは本来、真理、絶対なものを指すと思うが、もしそうであるならば②③の生き方をする人の中にのみ假有から実有への橋が渡されるように思う。(仏教的求道の根本目標は真理への合一、無限への帰一であるかと思う)

もし実有なものを假有の帰するところとみるならば、①②③それぞれの生き方をする人々に皆、実有として残るものがあると思ひなければならぬでしょう。人間一生のことを「縁起」の初めと終りであるとき、実有として残るものは何んだらうか。私はそれは「業」のみであらうと考えるのです。聖道門に對して浄土門が開かれたのは、これに他ならないともいえるでしょう。

悟りへの道—聖道門

救いへの道—浄土門



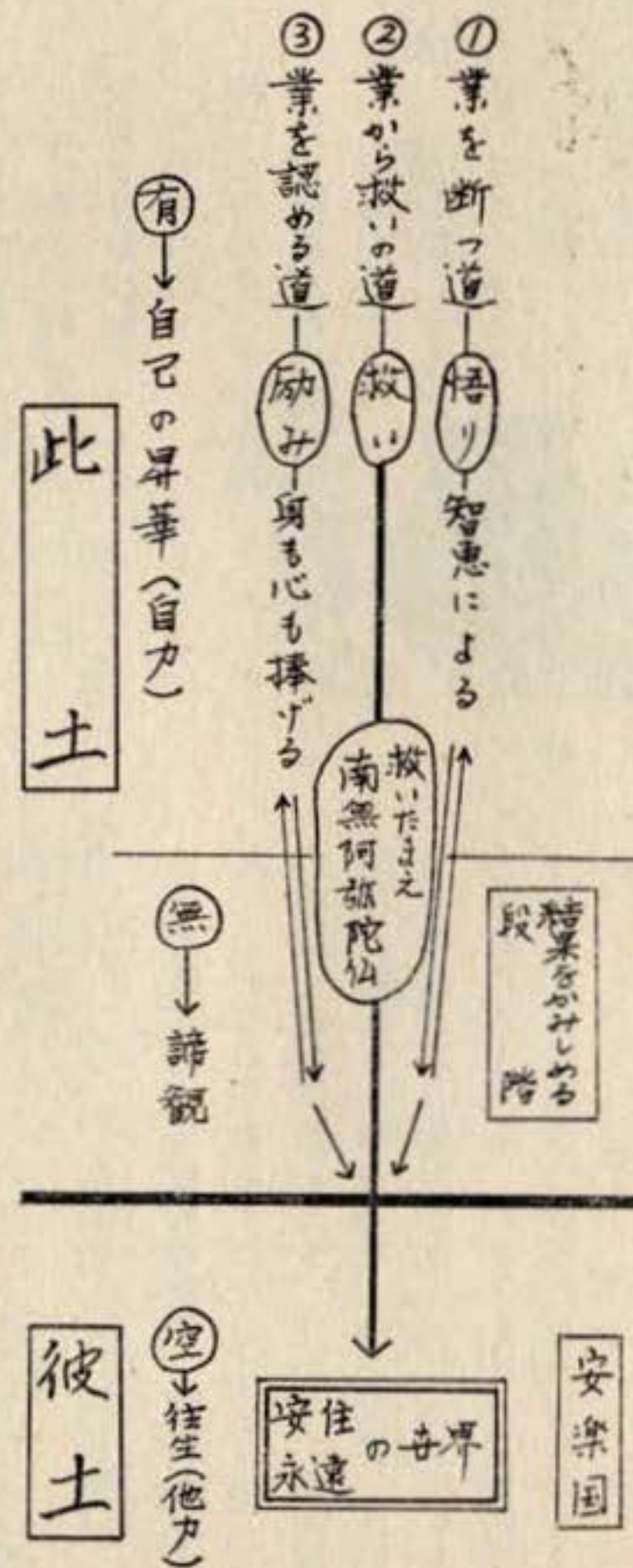
《現実生活の中での精進の段階》

これは実有としての真理への合一と業の救いにあつたとみてよいのではないだろうか。ただそれを無常と無我の立場から眺めて、今日までに見られるような悟りへの論理と他力の論理が生まれ出たとは見られないだろうか。

勿論、仏教の求道がここにあることは異議のある筈がない。しかし、これを基盤として仏教全体の姿勢の悟りをみつめる眼から「有」と「我」の立場に立つことを含めて、もっと現実的な自分（組織・集団）をみつめる眼、業をみつめる眼へ切り替えられてよいのではないだろうか。

私は仏教の教えを次のように分けて、有限な世界に於ける宗教生活、宗教的な生活から永遠への世界に導びかれて行けるものだと考えているのですが、如何なものでしょう。

かなり学問的な言葉を無視して独断な範疇の中で処理していることと思いますが、敢えて何も判らない者の私見とお見とり頂けたら幸甚の至りと存じます。



紙面の都合で簡単に説明させて頂きます。

○私は仏教に於ける「信」とは智度論にあつた、

「智慧己れを知るを名付けて信となす」というのがよいと思うのです。正しい信とは、

自分の本当の姿を掴まえ、

どのようにしてその極限まで、自分の持った能力を発揮させるか

どのようにして自分を昇華させて行くか
どのようにして安心の生活確立して行くか

に対する行動のことである。

○正しい自分を知るためには、自己の業を知ること

持って生まれた能力を知ることである。○業とは、

この世の中に生まれ出て来るから死に至るまで、すべて不可思議の縁の結合による他のものはない。その中で、私の思考や行動を決定させるのに大きな要因となっているものが二つあると思う。

①私に暗示を与える一般には見えない力

(私をとりまいた人々・伝統・社会の影響等)

②私自身がつくった過去の足跡

(実績・経験・思考方法・眼等)

この二要件は常に微妙にからみ合い、私の心と頭脳に極めて強力な影響を与えて、私の次の判断・行動を位置づけ、規制ずけてしまふようです。これは私が背負った業である。一面、私の所作はすべて他に与え残す業となつてしまふ。

仏教が現代に生きるためには、仏教が語る深い生の真理が、現代の悲劇を最も深いところで見つける眼のなかからとり出されてこなければならぬのではないか、という文章を読んだことがあるが、私は「業の自覚と処理」こそ、これにこたえる問題であると思う。

○業を断つ道とは、

縁起の理法をわきまえ、自己の人生に真面目にとりくむ生活である。飽くまでも冷静な知恵の生活——頭にこない生活のことだ。

○業から救いの道とは、

救いたまえ南無阿弥陀仏で、自分に対する自覚から、自分の持った小さな至らないはか

らいや分別などを捨てて、その身そのままに仏にお任せする生活の仕方である。それに徹すれば真智が働き、業から救われる生活ができると思えられるもの。

○業を認める道とは、

子供に、恋人に、仕事に、奉仕に命をかけた励み、身も心も捧げることのできる生活がある。これはただ在りのままの人間の欲望に生きる生活である。しかし、その心は「南無」に通ずるし、自分の持てる力のすべてをつくし、真心を余すことなく発揮するのであるから、これもまた宗教的生活である。

○以上三つの型の精進の生活が夫々に

「後悔と弁解は無用である

一つ一つに

持てる力のすべてを発揮した人にとってただ残るものは結果をほほえみ受ける

合掌の心のみ」

だという諦観になると思う。

○諦観の境地を得ることの反復が行われる中で人々は「合掌の心」に有限の祈りから、有限への限界を知ることになると思う。

対象は有限から無限へと切りかえられて、

自力から救いを求める他力へと移行して行くことになる。

往生安楽国はここに初めて存在価値をもつことになるのではないか。

○知恵と慈悲の教えが「知恵即慈悲行」として、現代人の深き生き求めるところに触れて来ない限り、「有」と「我」に立って現実生活を謳歌しようとする意欲もまた空虚な形骸化された利那主義に終つてしまふのではなからうか。

○現実生活に対する肯定的なアドバイスのできるカウンセラーであつてこそ僧たる有資格者であらう。

人の目に見えない筈の、その業が読みとれてその業に対する生活の指導、指針が与えられてこそ真の宗教者ではないだろうか。

○組織や集団に於いても、業に対する問題の所在は個人と同様である。個を没却した組織人や考えることを止めた人々にとつても業がわが身の幸不幸と、わが人生につながる問題であることの認識は容易なものではあるまいか。

ひとくち伝記 (三)

大日比の念仏者

高橋 良和



明治維新に数々の人物を輩出した長州の萩からわずか三十分、そこに長門市がある。

この長門市から支線が出ている終点が仙崎である。仙崎は名高いかまでの産地であり、ここから九州京阪神へと、かまぼこが送られている、その仙崎から海をへだてみえる島が大日比である。

この大日比にある名利西円寺の周囲は全く山陰きつての信仰のところ、漁師が網を引くときにも、ナムアマダブツとなえて魚を捕るし村の人たちが道で会ったときのあいさつも、合掌してうけこたえするといわれたほどのところである。

その小高い丘にある西円寺は昔から大日比三師といれる法

齊法州法道の、上人が輩出して、今日の信仰をかたちつくり、熱烈な教化に挺身されたところである。この三師のことについては大日比三師講説集があつて血のにじむような教化のあとを偲ぶにふさわしい語録であるがこのあとをついだ全くの篤者というのか、信仰者というのか、念仏者というのかそれが河島諦定さんである。

河島さんは明治二十年に山口県豊浦郡田部の河島家の三男に生まれている。父は勤助といったのである。豊浦郡という大日比に近いところであり、この地の念仏者の家に生をうけたのである。河島家は子沢山とあつて一人の食いしを減らすのには寺におくることは昔はよくあつたが、根っからの宗教心の持ち主の河島さんは、自分の村の願王寺という寺へもらわれて、出家しようと自分で発心したということであ

る。

こうして、明治三十五年二月十五日十五歳で得度するのであるが、その発心の動機たるや、この地の願王寺で大日比西円寺の住職である常誉上人が布教していたので、その話を聞いて、突然発心したというのであるから、如何にその布教が真剣に子供の心をとらえたが想像されるのである。

ところでこの河島さんはやがて大日比西円寺の住に迎えられて、宗教大学を終えてから入寺するのであるが、それは大正四年二月十五日のねはん会の日であったといわれる。不思議なことである。得度の日と同じねはん会であった。

この入山の日河島さんはふと、弟子をみながら、わたしはお釈迦さまの命日であるねはん会に得度して、仏弟子となつたのは、一ばんよい日である。出来るなら往生するのもこの日がよいが、しかし、これに仏さまのお計いじやからなあ。

となに気なく語ったということである。

不思議は更に不思議を生んで、昭和四十三年二月十五日、この日もねはん会である。

その日に河島さんは枯木の折れるような音もにて眼を閉じたのである。八十三歳、全く天寿を全うしながらも、その芳香を日世に残して極楽に旅立ったのである。

念仏者の最後はかくありたいと思うのはわたしばかりではない筈である。

河島さんには好伴侶が一つあった。古びた茶色のトランクである。あんなトランクはこの頃見ようと思つて、そこらの古道具屋の五、六軒をさがしたつて見あたりそうにない。

どこへ行こうが、この古びた禿ちよろけのトランクは河島さんのお伴であつたということである。

今どきあのトランクをさげさされた、そこらの青年なら、「ゴメンゴメン」と退散するほどのしろものであるが、それに加えてもう一つ古いものがあつた。

それは懷中から出す、あの財布のよごれた垢じみたのも、河島さんの終生離さなかつたものである。財布はあり余つた金を入れたものでないので、遠距離の旅のとき汽車賃だけ、それも目的地に行くまでの片道の旅費だけであつたらしく、かえりの片道は布施の方が多かつたのではないだろうか。

終始木綿の着物、これも禿げた衣を召して、昭和三十六年には池田勇人総理大臣を私邸に訪ねたのである。

というのはいよいよ法然上人の七百五十年遠忌か三月に迫つてきているときであり、噂を聞くと、吾が師法然上人に大師号の諡号が下がるという前のことなのである。

この上は河島さんに出てもらうより仕方がないというの

で、日頃親交の厚かった岸信介元総理を訪ねたのである。

総理あなたの浄土宗の人でございます。この日本に念仏を弘められた吾が親師を何卒顕彰していただくのにその筋に御努力いただきたい。

とぎれとぎれながらも河島さんの声に、池田総理の心を動かしたようである。

なんとか御内意を得ていただきたい。

河島さんは念を押すと池田総理も静かにうなずいたのである。

その横にあつた禿げたトランクそしてうすよこれの衣、どうみても総理の目の前にはふさわしくない風裁であったが、河島さんの背後からは、まるで光が放たれているようにみえた。

おねがいします。あなたの努力で。

河島は低い声でもう一度いうと、合掌しながら、かすかにナムアマダブツととなえたのである。

池田総理も思わず手を会わしてかしらをやおらさげてこのねんぶつの声に和したようであった。

その結果が和順大師の諡号となるが、河島さんの影の努力があつたればこそということである。

一田牛畝宗匠は吾が親師に「和順大師や春の雪」という句

をつくっている。春の雪がとけはじめた頃河島さんのところに池田総理から電報がきて「ゴアンシンオコウ」とあった。河島さんはほっと安心したようにうすぐらい西円寺の本堂で、またねんぶつしていたのである。

ねはん会に出家して、ねはん会に晋山、そしてねはん会に逝った河島さんのあの姿が、今もなお眼にうつるようだ。

浄土トラクト

選択集私解

竹中信常著 価125・〒30

ものいう石

竹中信常著 価150・〒45

一枚起請文をめぐつて

村瀬秀雄著 価120・〒35

四季の寺まいり 再版

安居香山著 価30・〒15

浄土宗のおしえ 五版

宮林昭彦著 価30・〒15

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい。御希望の方は弊会までお申込み下さいませ。

編 集 後 記



○漸く寒さもやわらいだと申したいのですが、今冬は例年になく異常温暖でもあり、また二月半ばからは雨降りの日が多く、西高東低の気圧配置もいくらかくいるがちな、身体をととのえにくい季節でしたが皆様は如何お過しのことでしょうか。

○三月、寒さからようやく開放され、桃の花も咲きほころぶなかに、華やかなヒナ祭りを迎え、それまでのやや閉鎖的な気分から、開放的な心地がいたす月と申せましょう。寒さ中で練りに練った思いを表面に打ち出す月でもあります。

○その初めての言動に一コマの停止を求め、自己の反省を求めてくれるのが彼岸会であります。たむけた花の薫り、あたりにたちこめ

るお線香の香りや煙の中に亡き人を偲び、その心やすまる中に、自己の日頃の行ないやことばの節々に至るまで冷静に考え、明日への生活の糧となるようにしたいものです。

○こうした意味から彼岸法話を寄せられた福岡の一田善寿氏の日頃接している死刑囚との対話をおりこんだ玉稿は他人ごととは思えず、何か自分自身にも反省を求められるかの如きものです。

○一方、先月号および今月号に玉稿をいただきました松川文豪氏は日頃より宗内外で活躍されている三十半ばの油の乗りきらんばかりの実践家ですが、この玉稿を書いて間もないころ、氏が校長をしている東京都荒川区にあります聖橋高校の本館が半焼してしまいました。心中あまるものを感じ誌面をお借りしお見舞申しあげたく存じます。

○さて先月号をお手元にお届け致すのが大変遅れましたことをおわび申し上げます。編集部についてもながらの不手ぎわと印刷所の方々が風邪のためにたおれたのですが、理由はともあれ、一層の努力をいたす覚悟ですのが今後共よろしくお願い申し上げます。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄 土 三 月 号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十四年二月二十五日 印刷

昭和四十四年三月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

郵便東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

大 正 大 学

東京都豊島区西巢鴨 4 の 530 電話 (918) 7311

昭和 44 年度学生募集

募集人員 200名・2, 3年若干名 大学院修 40 名・博13名
カンセリグ研究生 (10名)

出願期日 第二次 3 月 2 日 ~ 3 月 27 日

試 験 日 第二次 3 月 28・29 日

学 部 専 攻 科

仏教学部 仏教学科—仏教学・梵文学・浄土学・天台学・真言学

文学部 文学科—国文学・米英文学

史学科—日本史学

哲学科—西洋哲学・宗教学・中国学

社会学科—社会学・社会事業

大学院文学研究科—仏教学・国文学・宗教学

カンセリグ 研究生

男女寄宿舍あり☆詳細は同学庶務課入学案内へ (〒 150 円封入)

村瀬秀雄 訳

新刊 和文浄土三部経

附…法然上人撰「三部経釈」抄述
念仏信仰の聖典三部経の全訳

定価二〇〇円 送料五五円

発行所 法然上人鑽仰会

宮林昭彦 著

「極楽に生きる」

宗祖のご生涯を通して、現代に生きる
私たちに指針を与える好著

定価二六〇円 送料五〇円

御希望の方は弊会まで申込み下さい。

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和四十四年二月二十五日印刷 昭和四十四年三月一日発行

浄土

第三十五卷

第三号

定価金六拾円 (送料六円)